

ホラズムにおけるイブン・スィーナ

B. アブドゥハリモフ・S. カリモフ

ウズベキスタン共和国の独立にともない、その豊かな精神文化の復興に対する関心が高まった。先人の学問的遺産への深甚なる敬意の表明として、大統領I. カリモフの1997年11月11日付けの政令によってホラズム・マアムーン・アカデミーが再興された⁽¹⁾。同年、ウズベキスタンはユネスコの決議にそって、このいにしへの学府の創立一千周年をおごそかに祝うことを決定する。

ヒヴァ市に再建されたホラズム・アカデミーは、ウズベキスタン共和国科学アカデミーの地方支部にあたる。これは、歴史学、考古学、哲学、言語学、文学、生物学に関連する諸々の学問セクションから構成されている。新たに成立した学術研究センターは、地域の経済および文化の発展にとって優先的な意義を有する基礎科学と応用科学の一連の諸問題を解決する使命を帯びているのである。

本稿ではその歴史に目を向け、中世の最も著名な碩学の一人、アブー・アリー・イブン・スィーナ Abū 'Alī b. Sīnā (980-1037年) がホラズムシャー⁽²⁾、マアムーン・イブン・マアムーン Ma'mūn b. Ma'mūn (在位 1009-1017年) の宮廷で展開した活動に検討を加えることにしたい。

10-11世紀にホラズムは、東洋イスラーム地域において、最も成熟した文化的中心地の一つであった。政治的な安定、経済的・社会的な発展、またホラズムシャー、アリー・イブン・マアムーン 'Alī b. Ma'mūn (在位 997-1009年) が学者たちに注いだ敬意と配慮に促されて、ウルゲンチ⁽³⁾には中央アジアの数多くの著名な学者たちが寄り集った。アリー・イブン・マアムーンの死後、彼のあとを継いだ弟のマアムーン・イブン・マアムーンは、兄の政策を引き継ぎ、学者たちにも多大の配慮を示して、学問研究のためのあらゆる条件を整

⁽¹⁾ ウェブサイト (<http://www.mamun.fan.uz/>) も存在する。なお、付注はすべて訳者による。

⁽²⁾ ホラズムの支配者の称号。11世紀末から13世紀前半にかけて存続したいわゆるホラズムシャー朝の君主に限らず、古来この地を治めた数多くの支配者がこの称号を帯びた。

⁽³⁾ 古ウルゲンチ (以下も同様)。

えた。その結果、この時期ウルゲンチでは、数学、天文学、化学、医学、その他の諸分野で本格的な研究が行われることになる。

20世紀の研究者たちはこの学問の中心をアテネ、バグダード、ニシピス、ジュンディーシャープールなどのいにしえのアカデミーになぞらえ、これもまた学問上のアカデミーであったとの結論に至った。史料上にこのアカデミー創立の正確な年代はみられないが、それは1004年のことであったと推定される。

ホラズム・マアムーン・アカデミーは、1017年までと、それほど長くは存続しなかった。しかし、この間にそこでは、数学、天文学、測地学、鉱物学、化学、医学、薬学、歴史学、文献学、哲学、文学といった世俗の諸学問が高度に発達した。

このアカデミーにおける諸学問の高度の発達を促進したのは、アブー・ナスル・イブン・イラーク Abū Naṣr b. 'Irāq (1036年没)、アブー・ライハーン・ビールーニー Abū Rayḥān al-Bīrūnī (973-1048年)、アブー・サフル・マシーヒー Abū Sahl al-Masīhī (1010年没)、そしていうまでもなく、アブー・アリー・イブン・スィーナールといった、当代の傑出した学者たちの活発な学術活動であった。

イブン・スィーナールは、故郷の都ブハラがカラハン朝に占領されたのち、ヒジュラ暦395(西暦1004/1005)年にホラズムに赴く。ホラズムの宮廷で彼は厚遇され、学者当人が記すとおり、「自身の位と地位にふさわしい」俸給をあてがわれる。ここで彼はイブン・イラークやアカデミーの他の学者たちと密に接しながら研究を行い、それ以前は文通を介してのみの知己であったビールーニーとも直接会している。この邂逅は、イブン・スィーナールの数学と天文学の知識の形成に積極的な役割を果たした。

ホラズムにおいて少壮のイブン・スィーナールは、天文学と医学の領域への通暁でその名を知られていたアブー・サフル・マシーヒーとも出会う。イブン・スィーナールはマシーヒーの医学の知識を高く評価し、この学科目に関する彼の講義を聴講し、のちに彼の諸著作、とりわけ『医学に関する百書 *al-Kutub al-mi'a fī al-ṣan'a al-ṭibbiyya*』を、自身の名著『医学典範 *al-Qānūn fī al-ṭibb*』の執筆のために利用した。

ホラズムにイブン・スィーナールが留まるのは1010年までのことである。というのも、ホラズムシャー、マアムーンのもとから他の学者たちと連れだって出向するようにガズナ朝のスルターン、マフムード Maḥmūd (在位998-1030年) から求められると、ガズナの宮廷に赴くことを欲しなかった彼は、1010年、マシーヒーとともにグルガンへと発つからである。

ホラズム滞在期(1004/1005-1010年)に学者は、哲学、医学、化学、天文学に関するいくつかの論稿を執筆した。

周知のとおり、イブン・スィーナールは当時のおよそあらゆる学問分野に取り組んだが、

錬金術もその一つであった。当時、錬金術には多大の関心が寄せられていた。イブン・スィーナーは、ジャービル・イブン・ハイヤーン Jābir b. Ḥayyān (813年没) やアブー・バクル・ラーズィー Abū Bakr al-Rāzī (865-925年) といった中世の有名な錬金術師の著作に基づきながら、他の自然科学とならんで錬金術の研究も行った。錬金術に関する彼らの諸著作の影響を受けて、若いうちにイブン・スィーナーは、集成的な特徴をもつ錬金術論、『バラキエのための〔錬金〕術論 *Risāla al-ṣan'a ilā al-Baraqī*』を著している。

学者自身の筆になる『自伝』によれば、ホラズムにおいて彼は、ホラズムシャーの宰相、アブー・フサイン・サフリー Abū al-Ḥusayn al-Sahlī のために、さまざまなテーマのもとでいくつかの論稿を執筆している。そのなかには、彼の兄弟であるアブー・ハサン・サフリー Abū al-Ḥasan al-Sahlī に献呈された錬金術論、『錬金薬論 *Risāla al-iksīr*』もあった。つまり、イブン・スィーナーはホラズムにおいて錬金術の研究を継続しておこない、卑金属の金銀への変換(転化)に関する実験も自ら手がけるが、このことは後者の論稿の内容から明らかとなる。そのなかで彼は、人工の金を採取することは可能かどうか、また、もし不可能であるならば、それはなぜか、との問いを立てている。この問いへの回答を彼はのちに見いだし、それを哲学的知識の集大成として名高い『治癒の書 *Kitāb al-ṣifā'*』に書き記している。そこで彼は、化学的方法をもって金銀を採取しようとする錬金術師たちの主張や努力を鋭く批判している。学者のこの見地は、当時にあっては極めて先進的なものであった。

このほか、ホラズムでイブン・スィーナーは隕石の溶解実験も行うが、それについても、同じ『治癒の書』のなかで明らかにしている。

ホラズムにおいて、イブン・スィーナーはマスィーヒーとともに錬金術のみならず医学にも積極的に従事し、保健に関する大変有名な著作、略名『害毒の除去 *Daḥ' al-maḍārr*』を執筆する。この著作を学者は宰相サフリーに奉呈しているが、そのことは、同書序文における極めて礼賛に満ちた表現に投影されている。ホラズムにあつてイブン・スィーナーは、ホラズムシャー宮廷の宰相であるアブー・フサイン・サフリーを高く評価し、彼のことを、哲学をこよなく愛する人物と称している。同書は七章からなり、そのなかでは、不規則な生活様式、食事、日課に関連して人体にさまざまな症状を惹起しうる害毒について述べられている。学者のこの論稿はウズベク語とロシア語にも翻訳され、公刊されている。

ホラズムにおいてイブン・スィーナーは、学問的な創作活動と並行して、医学の実践にも積極的に取り組んでいる。わけても、この地で彼はグランガビン *julanjubīn* (すなわち、バラの花弁と蜂蜜を調合した薬剤) によって、ある女性の肺病を治療することに成功している。この一件について、彼はのちに自著『医学典範』のなかにも書きとめることになる。

宰相サフリーのために、イブン・スィーナーはさらにいくつかの論稿を執筆した。その

なかには、自然哲学の著作『大地がその域内で存立する原因に関する論考*Risāla fī 'illa qawām al-'ard fī hayyizih*』、医学の論稿『(治療時の) 種々の過誤の矯正*Tadāruk anwā' al-ḥaṭā'* (*fī al-tadbīr al-ṭibbī*)』、さらには、『論理学に関する頌詩*al-Qaṣīda fī 'ilm al-manṭiq*』あるいは『論理学に関するラジャズ体韻文叙述*Urjūza fī al-manṭiq*』と呼ばれる論理学の論稿などが含まれている。

これらの著作は依然として研究されておらず、しかるべき研究者を待ちうけている。いずれにせよ、これらの著作の名称から判断すると、ホラズムにおいてイブン・スィーナは、化学や医学とならんで、哲学の諸問題にも取り組んでいたと考えられる。

結論として、次のように述べることができよう。イブン・スィーナの創作活動におけるホラズム時代は、同時代の著名な学者たちとの緊密な学術交流と実践的な活動によって特徴づけられ、その成果はやがて、哲学と医学に関する彼の主要な著作のなかに反映されることになったのである。

(ウズベキスタン科学アカデミー東洋学研究所所長)

(同副所長)

訳者あとがき

——ホラズム・マアムーン・アカデミー1000周年記念学会を見聞して——

木 村 暁

去る2006年11月2-3日、ウズベキスタン共和国ホラズム州ヒヴァ市および首都タシュケントにおいて、「ホラズム・マアムーン・アカデミーと世界の学問・科学の発展におけるその位置」と題される学会が開催された。これはユネスコの協賛を得て、同国の科学アカデミー、外務省、高等・中等特別教育省が共催したものである。この学会は当初、2003年のユネスコの決議を受けて、マアムーン・アカデミー創立1000周年にあたる2004年の開催を目指されたようだが、諸般の事情で一度ならず先延ばしになり、最終的には、04年11月9日付けの閣僚会議の決定にもとづいて、昨秋ようやく実施に漕ぎつけた。

ここに訳出したロシア語の論稿「ホラズムにおけるイブン・スィーナ」は、科学アカデミー東洋学研究所所長B. A. アブドゥハリモフ、同副所長S. U. カリモフの両氏が、この記念学会の開催によせて、国外向けの情報発信の一環として共同で執筆したものである。アブドゥハリモフ氏はアッパース朝(749-1258年)のカリフ、マアムーン(在位813-33年)が

設立した「知恵の館」（ウズベキスタンではこれも「マアムーン・アカデミー」と通称されるが、ホラズムのそれとは区別される）の研究で知られ、とくに精密科学の分野に精通し、カリモフ女史（父親はイブン・スィーナの『医学典範』のロシア語・ウズベク語訳注で名高い故U. I. カリモフ）は、化学・医学を専門分野として研究を重ねている。いずれも同国指折りのアラビストに数えられる。

本稿は2006年4月の段階で書き下ろされ、訳者の手に委ねられた。導入部分はアブドゥハリモフ氏が担当し、イブン・スィーナの活動を扱う本論（訳文第7段落以降に相当）はカリモフ女史の筆になる。後者はその後、本学会の報告集にはぼそのままの形で掲載された⁽⁴⁾。よって、多少新鮮味に欠けることは否めないが、ホラズム・マアムーン・アカデミーとは何か、またイブン・スィーナがそこでいかなる活動をしたかを知るうえで格好の材料となることは確かである。

さて、以下では、この学会がウズベキスタンでどのように位置づけられるかについて、若干の補足をしておきたい。

周知のとおり、歴史上、長らくホラズム地方の政治・経済・文化の中心だったのは古ウルゲンチであり、ヒヴァがそれにとって代わったのは17世紀前半のことである。支配者マアムーン一族の庇護下にあったゆえにその名を冠して呼ばれる学府（もしくは学派とも言う）、マアムーン・アカデミーが所在したのは、この古ウルゲンチにほかならない。もっとも、同市は現在トルクメニスタン領内に位置しており⁽⁵⁾、アカデミーの創立がウズベキスタンで祝われるのは一見すると奇妙である。しかし、ウズベキスタンではこれをホラズム地方全体の遺産と捉えることで、領域面での矛盾は生じないとの立場をとっているかに見える。その意味で、同国でこのアカデミーに言及する際に、「ホラズム」という語に意識的に力点が置かれるのは当然のことかもしれない。

ヨーロッパをはじめ日本や中東からも参加者を募り、国際的な研究会議という触れ込みで開催された本学会ではあるが、思いのほか政治的色彩の濃いものとなった。ヒヴァのイチャン・カラの特設会場で催された会議初日（11月2日）はカリモフ大統領の演説で幕を開け、この「祭典」の様子は国営放送のニュースでも大きく報じられた。参加者のなかにはドイツの著名なイスラーム研究者、ハンス・ダイバー氏の姿なども見られたが、見聞きしたかぎり

⁽⁴⁾ С. У. Каримова, “Научная деятельность Абу Али ибн Сины в Хорезмской академии Маъмуна,” *Хоразм Маъмуна академияси ва унинг жаҳон шим-фани тараққиётидаги ўрни*, Тошкент-Хива, 2006, стр. 168-170.

⁽⁵⁾ 近年トルクメニスタンで刊行された古ウルゲンチ関係史料集の序文においても、同市に「マアムーン」の宮廷「アカデミー」の稀有の学界が存在したことが指摘されている。Средневековые письменные источники о древнем Ургенче, Под ред. М. Айдогдыева, Ашхабад, 2000, стр. 10.

の印象では、会議は最先端の研究成果の発表と学術討論というよりは、マアムーン・アカデミーの意義を確認し合うことに重きが置かれていたようである。会議二日目は会場をタシュケントのティムール朝歴史博物館に移したが、やはり報告の多くは講演と形容されるものであった。こうしたなか、学会のテーマとは直接関係しないが、ホラズム地方を対象とする日本人研究者の二つの報告、堀川徹教授の「日本-ウズベキスタン国際共同作業によるヒヴァ・ハン国のカーディー文書研究」(ウズベク語)と、塩谷哲史氏の「18-19世紀ヒヴァ・ハン国のヤルリグ研究に関する問題に寄せて」(ロシア語)が注目を集めていたことを指摘しておこう。

おそらく、このような事物(多くは都市)または人物の顕彰・記念は、地域振興や国民統合にとっても少なからぬ意味をもつものと思われる。前述の大統領の演説中には、ホラズムの人びとの日頃の献身的な労働をねぎらい、これを高く評価する文言も織り込まれているが、それに象徴されるように、こうした大規模な記念行事は中央が地方にしかるべき配慮(行事開催に関連する予算配分も含む)を示す好機とも言え、政権が求心力を保つうえで一定の役割を果たしていよう。事実、昨年はカルシ2700周年、今年はサマルカンド2750周年とマルギラン2000周年といったように、ここ数年来、国内諸都市のあいだでバランスよく順繰りに記念行事が催されていることは、それを物語っている。大統領は同じ演説のなかで、高等教育機関におけるマアムーン・アカデミーに関する授業・教育体制の充実に着手するよう科学アカデミーに督促する意向も表明しているが、それはこうした行事と教育をリンクさせながら、国民意識や愛国心の醸成を図っていくことを狙いとするものであろう。

ホラズム・マアムーン・アカデミー1000周年記念学会は、おおむね以上のような条件と背景のもと開催されたのであり、したがって、一般に想像される研究会議とはおのずから趣を異にすることになったと言える。

最後に、この2007年にタシュケントでは、科学アカデミー歴史研究所、ティムール朝歴史博物館、ユネスコの国際中央アジア研究所(IICAS)が共催する「イスラーム的価値観:寛容、団結、ヒューマニズム(歴史哲学的・文化的諸相)」(6月26-27日)、またフランス中央アジア研究所(IFEAC)とタシュケント・イスラーム大学が共催する「近現代における中央アジアとヒジャーズのあいだの巡礼路」(10月3-4日)という、二つの注目すべき国際学会の開催が予定されていることを付け加えておきたい。設定されているテーマや参加予定者の顔ぶれからは、いずれにおいても興味深く質の高い研究成果の報告が展開されるものと期待される。

(東京大学大学院人文社会系研究科博士課程)